OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Interface humanities 07
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12966
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Interface Humanities

07

知のプロセスは共有されるか

Contents

特集　知のプロセスは共有されるか

2　座談会　知のプロセスは共有されるか
鷲田清一×森宣雄×蓮田隆志×
久保田美生×加藤謙介
司会　三谷研爾

5　マッピングが可能にした人文学のインターフェイス
田沼幸子

5　哲学における〈接続詞〉
家高 洋

10　コミュニケーションツールとしてのディスカッション
ペーパーと討議支援マップ
森 宣雄

10　『討議支援マップ』と他の手法との違いについて
加藤謙介

12　リニアな思考の手前でたちどまる
三谷研爾

ih.Topics
21　イベント・刊行物情報

22　Interface Humanities Illustrated
《インターフェイスの人文学》を描く

現代を測る
26　「二つの文化」と科学史の役割
山中浩司

人文学のフロンティア
28　歴史学の刷新または全体を見るということ
桃木至朗

人文学のフロンティア
30　フィガロはなぜ理髪師にして「街のなんでも屋」なのか?
伊東信宏

32　編集後記

Feature: How Can We Share Knowdge in Process

2　How Can We Share Knowdge in Process

5　Mapping Interface Humanities
Sachiko TANUMA

5　Philosophical Sense of "conecting"
Hiroshi IETAKA

10　Discussion Paper and Discussion Support Map as Communication Tools
Yoshio MORI

10　Discussion Support Map in Contrust to Other Methods
Kensuke KATO

12　Before the Linear Way of Thinking
Kenji MITANI

21　Interface Humanities Topics

22　Interface Humanities Illustrated

26　'The Two Cultures' and the Role of History of Science
Kouji Yamanaka

28　How Can Japanese Historians View an Entity
Shiro MOMOKI

30　Why Is Figaro *barbière* and *factotum*
Nobuhiro ITO

32　Editorial Note

Interface Humanities

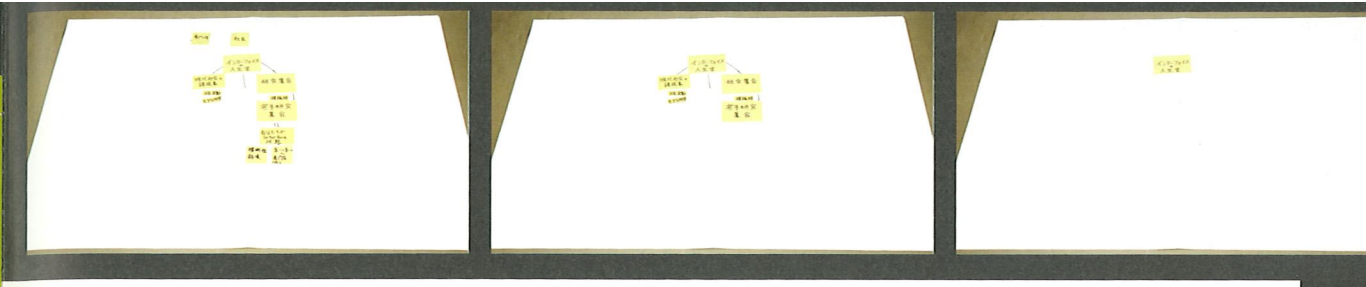
知のプロセスは共有されるか

特集

鷲田清一・森宣雄・蓮田隆志
久保田美生・加藤謙介
司会　三谷研爾／撮影　内海博文
会場　CSCD（コミュニケーションデザインセンター）

「インターフェイスの人文学」に参加する若い研究者たちを糾合して〈研究集合〉がスタートしてから２年半たちました。さまざまな不安ととまどい、葛藤や緊張をはらんだ活動をとおして、人文学の知がまさにそこから立ち上がってくる生成的な空間をいかにして構築・持続させるかをめぐって、冒険的な議論がかわされ、また手法の模索がすすんでいます。それは、臨床と横断という本プロジェクトのキーワードを、抽象的な概念として精緻に練り上げるのではなく、むしろ知的実践のメチエとして荒々しく掴みとる試みだといえるでしょう。

〈研究集合〉は、「インターフェイスの人文学」のコアとなって、人文学の再定義への足場になっていくものと期待されます。
今回の特集では、〈研究集合〉に関わっている若手４人に鷲田清一プロジェクトリーダーを交えた座談会をお届けします。若手にはそれぞれの〈研究集合〉経験について事前レポートを提出してもらい、また当日には討議支援マップによるマップ作成を同時進行的におこなって、〈研究集合〉でのコミュニケーション・メソッドの意義を再確認することになりました。



↑上の写真は座談会での発言を討議支援マップに落としていく様子

〈研究集合〉という場

三谷　本21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」もいよいよ最終年度を迎えました。これまでニューズレターでは、「インターフェイスの人文学とはいったいどういうものか」をさまざまな切り口から紹介してきましたが、もういちどおさらいしておきましょう。

　プログラムの核にあるのは、現代社会で起こっている葛藤、対立、摩擦、軋轢といった、従来のディシプリンではうまく扱うことができなかった現象を取り扱うということです。こうした現象を探求するモデル研究として、「臨床」と「横断」というキーワードを軸に六つのグループが構成され、それぞれ従来のディシプリンをにらみながら、具体的なテーマを設けて研究してきました。これらモデル研究に対し、いわば理論的研究のグループとして、特任助手や特任研究員、リサーチアシスタントが中心となる集まりが二〇〇四年度から始まったわけです。これが若手研究者の〈研究集合〉、通称「若手研」ですね。

　そこには、人文学という枠のなかでではありますが、いろんな研究分野の人が参加しています。哲学、教育学、歴史学、人類学、文学、言語学、芸術学などなどさまざまな分野を背景に持った若手研究者が二〇人ばかり集まったわけですから、とうぜん専門領域の横断性・越境性が生まれますね。他方でおたがいの関係についていうと、「歴史のことはある程度わかっているけれども、哲学については素人だ」とか「音楽の研究をしてきたので教育問題についてはよくわからない」というように、相手の分野に対してたがいに非専門家である。

　ここに専門家と非専門家のディスコミュニケーションという臨床的な問題が生まれることになります。つまり若手研は、このCOEプログラム全体が抱えている横断性と臨床性という課題を凝縮した形で内部に抱えこんでいると言えるんじゃないか。そう考えて、今日はこの若手研を推進してこられたメンバーの中の四人の方に、プロジェクトリーダーである鷲田さんを交えて、実際にこれまでどんな経験が蓄積されてきたか、その中でどんな課題や方法、方向性などが見えてきたかについてお話いただきたいと思います。

　まずは、この二年あまりの若手研の活動を振り返って「この一言はグッときたな」というような印象的な言葉や場面を伺えますか。

加藤　私は心理学が専門で、他の分野のこともつまみ食い的に本などで読んだりはしますけれども、こんなに大勢の異分野の研究者と接する機会は今までほとんどありませんでした。それでいざ始まると、「こんなことでなぜこんなに議論になるんだろう」と思うほど、延々と議論が終わらなかった（笑）。たとえば歴史学と人類学の間には、どうも見えざる根深い対立があるようで……。

鷲田　そうでしょうね（笑）

加藤　あるいは、なぜそこに、それほどまでに熱意を込めるのか？と思うこともありました。たとえばある哲学畑のひとが、「書く」という行為に対して、私にとっては予想外の決意・熱意をもって発言することもありました。ごく当たり

※ 文中のカラーの文字は、討議支援マップに載ったキーワード

マッピングが可能にした人文学のインターフェイス

田沼幸子

「インターフェイスの人文学」に参加している社会学、歴史学、人類学、言語学といった分野は、「社会科学」にも片足を置いている。そして、社会科学には事実の探求によって問題の「解決」を志向する性格が強い。だが近年、学問が「事実」や「問題」を選択すること自体に、広い意味で政治と呼べるファクターが介入しているのではないかという、深刻な問いが発せられるようになった。〈研究集合〉での議論が最初のうちスムーズに進まなかったのは、各ディシプリンの閉鎖性のためではない。むしろディシプリンを横断するかたちで、学問の妥当性や臨床性を〈審問〉に付す議論が巻き起こったからだ。

メディアスタッフの久保田さんが主導して開発したマッピングは、この〈審問〉から私たちを解放してくれた。いったん、マップに書かれたものを目にすると、〈審問〉は、案外、ワンパターンなことに気づいてしまう。矢継ぎ早な論争が、マップを前にして静まると、論争には加わってこなかった民族学や美学、文学のメンバーたちが、ぽつぽつと語り始めた。彼らが語る研究対象への愛着や、二律背反を大事にする議論が、共に語りあうべきものとして見いだされていったといってもよい。こうしてようやく、私たちの集まりは人文学的なインターフェイスの場になっていったのだ。

田沼幸子（たぬま・さちこ）
一九七二年生まれ。COE特任研究員。先行は文化人類学、フィールドはキューバ。二〇〇五年度には本COEの助成を受けて、シンポジウム『ポスト・ユートピア：フィールドからのアプローチ』を開催し、二〇〇六年度には、報告書『ポスト・ユートピアの民族誌　トランスナショナリティ研究5』を出版。二〇〇七年度には、さらに加筆修正したものを、冨山一郎・石塚道子両氏との共編で人文書院より出版する予定。

哲学における〈接続詞〉

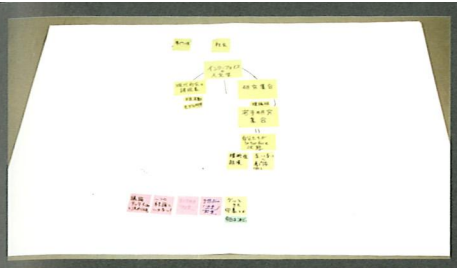
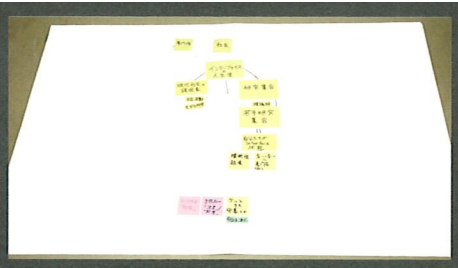
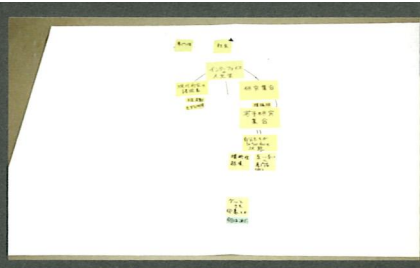
家高洋

学部生のとき、デカルトやフィヒテを原典で読む演習に参加した。そこで驚いたのは、ほとんどページが先に進まないことである。いつも議論の焦点になったのは、「それゆえに」「というのは」などの接続詞の意味の読解であった。様々な時代の哲学のテクストを精読して行く中で、〈接続詞への感覚〉が私にも徐々に育まれていったように思う。

哲学における〈接続詞〉は、「理由」や「原因」の接続詞だけには限られない。物事の第一原因を問う近世哲学と、現象の背後へ問い進むことを躊躇う二十世紀の哲学とでは、〈接続詞への感覚〉が明らかに異なっている。たとえば現象学者のレヴィナスは「言い換えれば（c'est-à-dire）」という日常語を、自身の哲学を語るさいの〈接続詞〉として意識的に使っている。新しい思想が生じるときには、〈接続詞〉への感覚や使い方も変化していくのだ。

最近は、人文学でもパワーポイントによる発表が増えてきているが、画面と画面とのつながりがわかりにくいときもある。これは、因果連関をつきつめていく哲学的思考の伝統の忘却とも見える。その反面、新たな〈接続〉の仕方が生まれつつあるのかもしれないし、またそれに自分をしなやかに開いていくことも大切だろう。

家高洋（いえたか・ひろし）
一九六六年生まれ。COE特任研究員。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専攻：哲学・哲学史、現象学、科学技術論。論文：「奥行きの経験」（『カルテシアーナ』第三号）、「身体と空間」（『メタフュシカ』第三号）他。翻訳：ブーヴレス『ウィトゲンシュタイン、近代性と近代主義』（『季刊 ichiko』第三六号）他。

前に思っていた「書く」ことが、自分はあまり気にしていなかった「書く」ことに、思わぬ「深み」があることに驚かされました。

蓮田　僕の場合も最初の一年くらいは、もっと効率よく議論を進めればよいのにという印象を持っていました。ダラダラと話しているわけではない。みんなかなり熱心に話しているのに事が進まない。そのうち脳内体力が衰えてくる、といったことが続きました。結論がひとつの方向に絶対に行かない。要するに自己紹介をかねた研究発表と、来週は何をしましょうかという非常に事務的なことが、同じ次元で議論されて、すんなり決まらない。物事を決めることに対して、徹底的に議論しなければならないという雰囲気にはすごく戸惑いましたが、今思うと、どうもそれが本質だった。

森　全体として見たとき、それぞれが自立した研究者で、専門家でありながら、相手の分野においては非専門家で、共通テーマがなかなか見つからない、だからリーダーもいない。そこが非効率の原因のひとつではないかと思います。

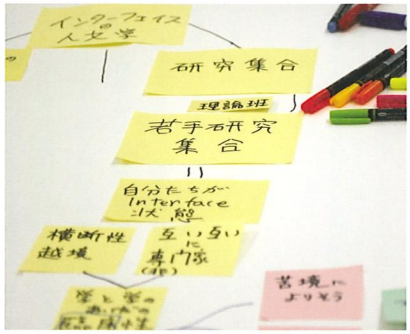
僕が一番印象に残っているのは「そろそろリーダーやりなさいよ」と言われたことかな。

加藤　去年の四月ごろでしたか。

森　結局、その時決めたルールというのが、ひとりの突出した個性で引っぱるのではない、つまりリーダーを作らない。共通テーマを立てないということ。共通テーマのない、しかも方向性の見えない中で、それぞれ通じ合わない論文を出し合って、「なんで通じないんだ、どうやったら通じるんだ」とカンカンガクガク議論する。そうこうするうちに、ある時期から「通じ合わなさ」をテーマにするこの研究会の特異性ができあがってきましたよね（笑）。

久保田　メディアスタッフという立場で参加した私の最初の印象は、とにかく驚きでした。何に驚いたかというと、普通は自分の述べた意見が相手に通じたかを確認しながらコミュニケーションを進めていくものだと思っていたんですけれども、若手研ではとにかくまず自分の考えを全部言い切る。伝わっているかどうかとか話の流れは二の次になっているように感じました。

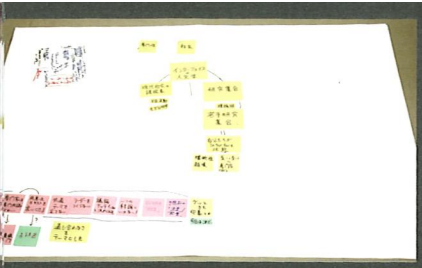
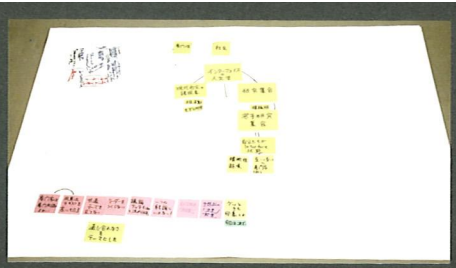
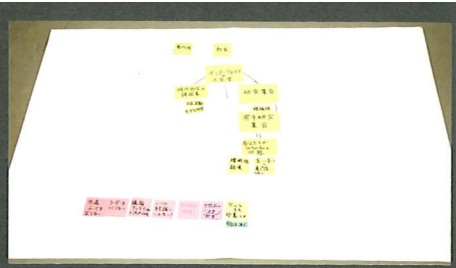
森　共通のテーマがないから、それぞれが「哲学のディシプリンではこうです」とか「歴史学ではこうです」というように、普通の軽いトークでは出さずにすませる、自分の身についたディシプリン性が浮き彫りになったといえるかもしれません。



鷲田　みんな未熟なのかも知れない——人として（笑）。

久保田　一年目などは専門的な言葉がでてきても、誰も「それってどういうこと?」といった切り返しをしないんですよ。その時に私が思ったのは「専門家は専門用語に弱い」っていうこと。

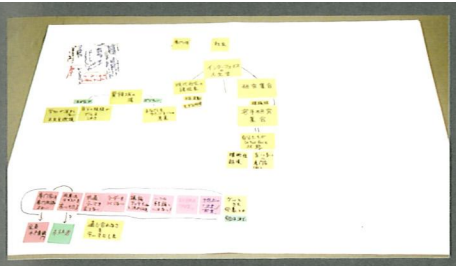
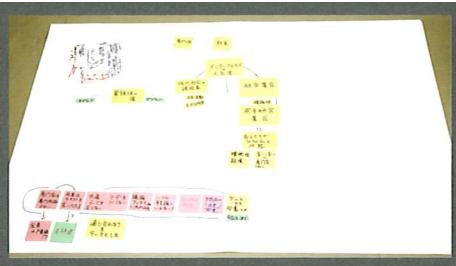
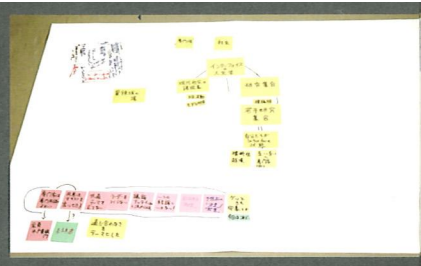
三谷　なるほど、みんなが専門用語という印籠を次々に出してきて、相手をひれふさせようとする。全員が水戸黄門の状態ですね（笑）。

人文学のコミュニケーション不全

鷲田　私自身もこれまで、いやというほど研究会で議論してきましたけれども、ある年代から異領域の人との仕事のウェイトが高くなってきたんですね。座談会などは別にして、ひとつのプロジェクトとして異領域の人と共同研究をやったとき私がいつも感じていたことと、皆さんがここで感じてらっしゃることと同じところがふたつあるなと話を聞いていて思うんですよ。

ひとつめは、違うディシプリンの人と何か一緒にやって、共通の視点を手に入れようとするとき、自分の視線がぶれるのがものすごくこわい、不安なんですよね。たとえば哲学だったら簡単には繋がらない、まだ検証しなければならないことがいっぱいある事柄なのに、流れに乗っかっていってしまう場合がある。

ふたつめは、自分のジャーゴン、専門用語を使わないで異領域の人と共同研究していると、分析がぐっと深まらないような印象を受ける。不完全燃焼の部分が結構あるんです。おしゃべりは楽しいんですけど、これだけ話しているのだからもっと深まれば良いのにという、もどかしさみたいなものがあるんですね。

ただ、私は「だから駄目なんだ」と言いたいんじゃない。共同研究をするということは、議論のテーマを共有するのではなくプロセスを共有することだと思うんですよ。それぞれのディシプリンには、それぞれの物を見る厳格な枠組みがあって、それが方法論というものだし、その枠組みを守っていかないと、それこそ視線がぶれてしまう危険性があるから、きちっと守ろうとするんですけど、それだけだったらそもそも共同研究をする必要はないわけです。

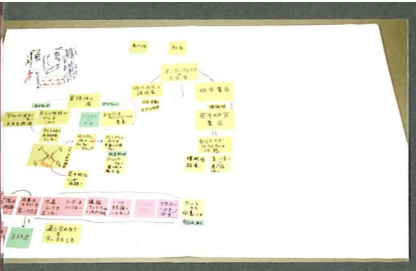
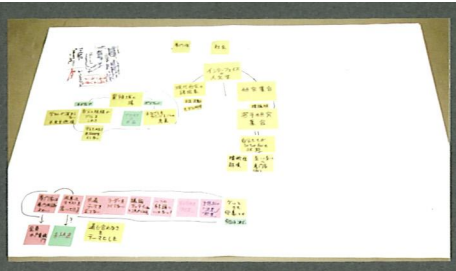
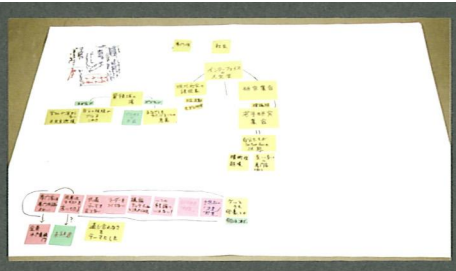
共同研究というのは、自分と眼差しの枠組みがまったく違う人、同じことを見てるのに何でこんなふうに見えるんだろう、こだわるんだろうと思う、つまり眼差しの質の違いを経験する中で、自分がずっと守ってきた枠組みが揺さぶられるから面白いし意義があると思うんですよね。仲間内での議論と違うところはそこだと思うんです。

そういうことを前提にして、今日の皆さんの話を聞いてびっくりしたのは、人文学の中でもずいぶんディシプリンの保守性、あるいは内閉性が進行しているという点です。それぞれ対象領域も違うし、現象の切り取り方も違うし、方法論も違うけれども、そもそも同じ人文学でありながらここまでカルチャーギャップが出てきているのかと。

三谷　カルチャー間のディスコミュニケーションが進行しているということですね。

鷲田　私はこの学問の世界で起こっていることと、今の社会で起こっていることがすごく似ていると思うことがあるんです。たがいに翻訳不能というか通訳不能というか……。たとえば高校生の間には言葉遣いから振る舞い、声のあげ方までやっぱり高校生のカルチャーがあって、おじさんやおばさんのグループが横に来ても彼らは別世界の人とみなして、触媒を探そうなんて気は毛頭ないじゃないですか。言葉を通じさせようという意欲すらない。

確かに学者の世界とか永田町の世界とか、高校生の世界とか、そこだけで通じるコミュニケーション圏ってあるけれども、それがさらに内閉的になってきていて、コミュニケーション圏のあいだのコミュニケーションまでが難しくなっている。不干渉というか、衝突すらしない。そういう社会のコミュニケーションの変化と並行して、学問の世界でも理系の細分化が進んでいると思っていたけれど、文系の中でも想像以上に進んでい

ることがわかりました。

その状態が、研究集合のスタートの時点の話だと思うんですよ。相手の言っていることが分からない、なぜこれにこだわるのか分からない、言葉それ自体が分からない人達が集まったんですよね。そんななかで、どこに行き着くのか分からないけれども、プロセスがすごく実は重要なんじゃないかっていう感触を少しずつ持たれてきたんじゃないですか？

森　普通の共同プロジェクトでは共通テーマを立ててそれをそれぞれのディシプリンが切り取るスタイルで、ディシプリン相互はあまりぶつからないですむ、棲み分けの形をとっていますが、若手研では共通のテーマを立てることをあえて選ばずに、自分たちの関係自体をテーマにしました。そのために、互いの専門間の通じ合わなさに正面衝突することになったのです。

蓮田　たしかに、最初は耐え難かった時間も、近ごろは「この議論はどこへ行くんだろうな」とニヤニヤ見ていることが増えましたね。それは単純な慣れではないと思いますし、無関心になったわけでもなくて、ある意味でプロセスの面白さ、楽しみ方を覚えたんだと思います。

鷲田　その気持ちはプロジェクトリーダーである私としても正直、同じなんですよ。どこに行くのかは分からないままに、何か方法を変えないといけないという気持ちがすごくあって、それで「臨床と横断」というモード設定をしたわけです。

若手研の報告書の中でたいへんクリアに整理されていますが、人文学には三つの他者がいる。自分たちを研究者として見れば、その研究対象としての人々、それから研究対象外の一般の市民、そして別の専門の人。今、その関係の設定の仕方に対して疑問が持たれているんです。つまり、今の社会のあり方は、必ずしも研究者の努力や啓発だけで何とかなるわけではなくて、市民がそれに参与していっても良いんじゃないか。市民と学問との関係がすごく動揺し始めている。だからこそ、問題となる他者との関係の三つの次元にまず身をさらけ出していって、新しい人文学のスタイルを模索しなければいけないと思うんですよね。

うまい喩えに、内田樹さんが「酸欠状態に耐えられる学問をしないといかん」とおっしゃっています。つまり赤ちゃんが生まれてくるとき、それまでの呼吸のシステムを全面的に変えるでしょ。おへそから血液循環で呼吸していたのを肺呼吸に変える。産道を通っている最中にそれを切り替えるわけだけれども、その間は呼吸不全、呼吸困難、あるいは酸欠の状態になっ

加藤謙介（かとう・けんすけ）

1975 年生まれ。2004 年 3 月大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。COE 特任研究員。専門はグループ・ダイナミックス。これまで、高齢者施設における動物介在療法・ロボット介在活動を事例とし、集合体の全体的性質（集合性）の変容過程について、研究を行ってきた。

蓮田隆志（はすだ・たかし）

1974 年生まれ。横浜国立大学教育学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。COE 特任研究員。専攻は近世ベトナム史。16～18世紀ベトナムの政治過程と国家構造とを、世界史的近世の文脈から把握すべく研究を進めている。

コミュニケーションツールとしてのディスカッションペーパーと討議支援マップ

森 宣雄

ディスカッションペーパー（以下DP）は、文字通りある討議の場に付すために提示された論稿であり、ふつうは、学術誌や書籍で公刊されるより迅速に（最先端の）研究成果を公表するため、問題関心を共有する範囲内で頒布される。その頒布版には討議の場で交わされた議論の履歴が付記されることもある。若手研ではこれとは別に、ある専門の学術論文としては未完成であるという初稿としての弱さから、逆に異分野の研究者同士がたがいに討議をさし込みあう余地が生まれることを期待し、異分野討議を促進するツールとして位置づけた。

提出されたDPをめぐる討議では、あるディシプリンにとっては「初歩的」といわれるようなものもあれば、思いもよらないような意外な問いかけも出される。それら多様な観点からの発言を一つに統合するのでなく、多様なまま並存させ、互いの差異を確認しあう過程から、新たな触発や節合を生み出していくこと、そのための場づくりのツールとして新しく考案したのが討議支援マップである。このマップを用いた討議では、発言を本人ないし聞いた者がひと言で要約してカードに記入し模造紙上に置いていく共同作業として進められる。ヴィジュアル化された議事録を参会者が同時進行で作っていき、互いの差異を自覚しながら議論の流れを共有することなどが可能になる。

『討議支援マップ』と他の手法との違い

加藤謙介

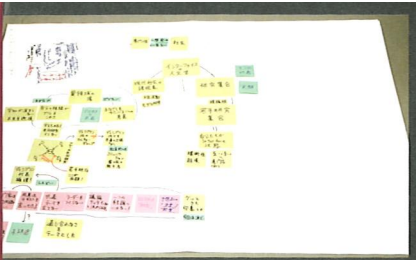
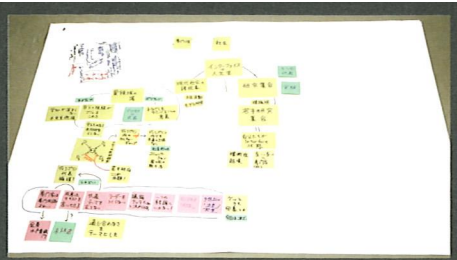
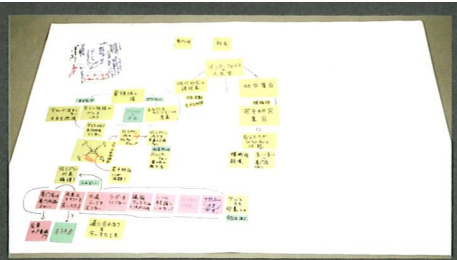
若手研究集合の『討議支援マップ』は、「キーワード」をマッピングする他の手法（KJ法やシンキングマップなど）と一見類似しているようにみえる。また、マップを用いるという点では、本COE内でも、「イメージとしての日本」班（イメ日班）がキーワードとマップを用いたワークショップの実践を重ねている。

『討議支援マップ』の特徴は何だろうか？

KJ法は、異質で雑然としたデータをグループ化して集約し、仮説やアイデアを生み出すことを目的としている。シンキングマップは、キーワードをつなげることで思考の過程を構造化することを目指す。イメ日班ワークショップの手法は、キーワード自体は決まっており、そのつながりや拡散するイメージを可視化することに重点が置かれている。

これらに対して、『討議支援マップ』は、ひとつの解答や統一見解を導くことではなく、議論の過程を可視化し、研究を行うプロセスじたいの共有を目的としている。

特に、参加者による多様なキーワードが示されたマップが場の中心になることで、過去の発言に即した「議論のつなげ方」の可能性が担保され、「民主的な討議の場」が成立しているところが特徴的であると言える。また、特別なソフトウェアではなく、模造紙や付箋紙といった極めてアナログな道具を用いることで、誰にでも使いこなせ、参加が容易であることも重要な点である。

ているわけです。それをくぐり抜ける体力がないと肺呼吸に変えられない。私たちがやっているインターフェイスの人文学の試みは、今まさに産道を通る過程なんです。

森　たしかに、きれいごとで済まない状態がまさに一年目二年目の頃で、毎回研究会が絶望的な場でしたね。共同研究っていうものをみんなで共同研究しようと言い出したのがやっと一年目の終わりくらいで、そこからようやくこの研究会自体を臨床の場にするということが共通認識になりだしました。

知の熱さ、面白さ

森　鷲田さんの『「聴く」ことの力』をみんな読んでいて、臨床性というのは、ある苦しみを持った現場に寄り添うというイメージが欠かせないんだという意見が強かったんです。でも、学問論としての臨床性は、学と学の間のぶつかり合う場にあるのかもしれない。これはメタ的な臨床性ですよね。インターフェイスの人文学ではどうなんでしょう。モデル研究ではかなり対象に寄り添う現場のように捉えられていましたが、一方で学と学のぶつかり合う場も臨床の現場ではないか。

鷲田　私は「現場」という言葉を自分の文章の中で使ったことがないんですね。現場っていうのは非常に難しい。たとえば、研究の現場っていったら、やっぱり大学、教室ですよ。でも哲学の現場――哲学っていうのは概念を作り出す作業ですから、僕は言説や概念を構築していくような場所自体が哲学者の現場だと思っている。

森　一方で、現場に行かないとだめなんだっていう雰囲気があるでしょう。

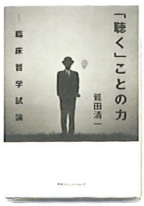
鷲田　一般に、何か大変なことが起こっている所が現場で、「お前は安全な所にいて、ちっとも現場に関わらないじゃないか」というような批判の文脈で使われるような気がしてならない。

　でも、この場だって現場なんです。ものすごくリアルな現場なんだけど、そこには危うさもあって、要は何も変えなくていいじゃないか、大学の研究者の集まる現場をきっちり作って作業していたらいいんじゃないかという話になるんですよ。しかしそれも違うと思うんです。そういう自己完結的なものとしての「知」は成り立つのか。その疑問があって初めて知の多様体というお題が出てくる。

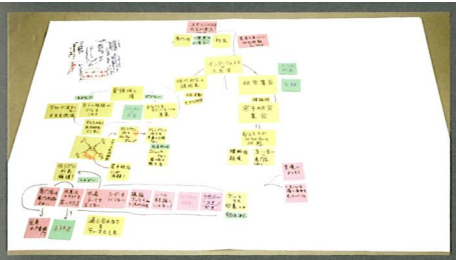
森　この若手研究集合という現場を作ることで、現場主義VS書斎と

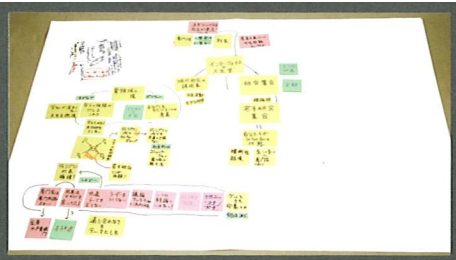
久保田美生（くぼた・みお）

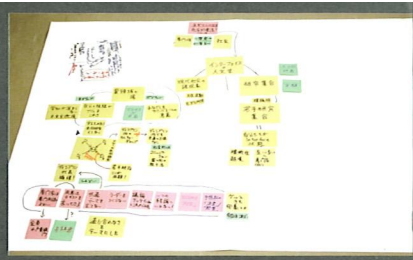
1972年生まれ。メディアラボスタッフ／COE特任研究員。NPO recip［地域文化に関する情報とプロジェクト］では、伝えたい人自らが映像を作る企画"Linkage project"の運営を行う。自身もドキュメンタリー映像を制作。作品に『ギャラリーで働くということ。』

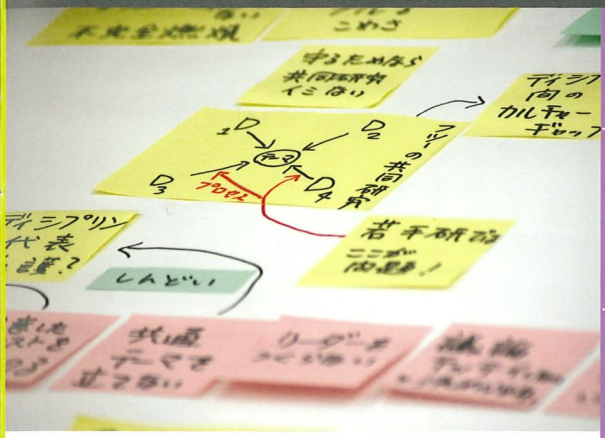


鷲田清一
『「聴く」ことの力』
（阪急コミュニケーションズ 1999）









リニアな思考の手前でたちどまる

三谷研爾

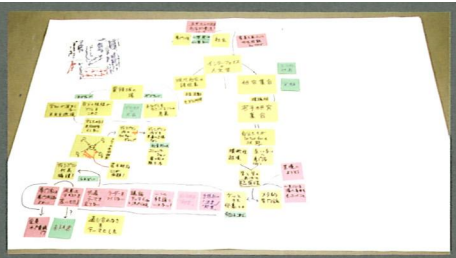
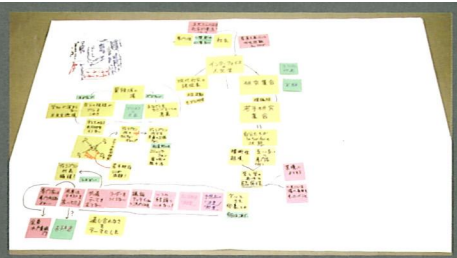
私たちがふだん書いている論文の核をなすのは、「ストーリー」だ。複数の事柄もしくは命題のあいだに因果連関を見いだし、そうした連関がもっとも高い説得力を発揮できるかたちで呈示する。組みあげられたストーリー展開の緊密さは、そのまま論文の〈強度〉として研究者のあいだで評価される。ところでストーリーとは、その本質からして線状的、つまりリニアなものだ。あと戻りすることは想定されていないし、いくつかの部分を同時的に俯瞰するためのものでもない。討議支援マップが、積極的に回復しようとしているのはこの点だろう。討議メンバーは、マップ上に落とされていくさまざまなキーワードのあいだを行きつ戻りつし、最初は繋がらないように見えていた項目のあいだに、関連の網を張りめぐらせていく。討議支援マップは、知がリニアなかたちに組み立てられる以前の、空間的な広がりや厚みが確かめられる視覚的装置である。それは、美術館や博物館でさまざまな展示物のあいだをさまよい歩くうち、自分の内部でなにかが生成していくのが感知されるのと類似の経験かもしれない。

いう二元論を崩す。でも、そこには自己満足、自己完結してしまう危険性がある。そうすると対象に戻っての横断・越境、臨床っていう話も大事になりますね。

鷲田　だから、二元論の中で対抗的に立てられる現場主義には立たない。だからといって学知の自己完結性に戻れるかというと、その退路も絶たれているということですね。そんな中で知的生産の新しいスタイルとかエンジンみたいなものを手探りで探しだせないか。

蓮田　蓮田さんでしたっけ？　事前レポートに「面白いっていうことの大事さ」を書かれていましたね。その面白いっていうのはどういうこと？

蓮田　ほとんど発言しないメンバーがいたんですよ。参加してないのじゃないかと勘違いされてしまうくらい喋らない。ところがある時、いろいろ意見がでながら消化し切れずにいると、ズイと出て

きて決然と「ここはこうやねん」と説明したんですよ。その言葉に「なるほど」と、全員が納得したことがありました。やはりテーマによって、非常に熱く語る人がいるわけです。

加藤　相手がすごく嬉しそうに話されていて、その研究が好きだということが見える瞬間に、僕も面白いと思う。そういう個人の思い入れやこだわりが、面白さの中身をすごく左右しているんじゃないかと思います。

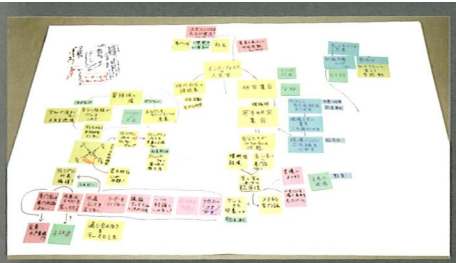
鷲田　面白いってすごく大事な感覚だと思う。そこに新しい知的生産のスタイルが生まれる鍵があるんじゃないか。その面白さとは何かというと、昔、桑原武夫さんの一番のほめ言葉は「おもろい」だったというんですよ。「あいつは出来る」とか「頭がいい」じゃなくて「おもろいやっちゃ」だった。桑原さんの言う「おもろい」っていうのは、何の保障もないし、どこに行くかわからんけれども、「目から鱗が落ちるような、何かグルッと転換させるようなことを起こしそうな奴だ」という予感を含んだ言葉だった思うんですよね。

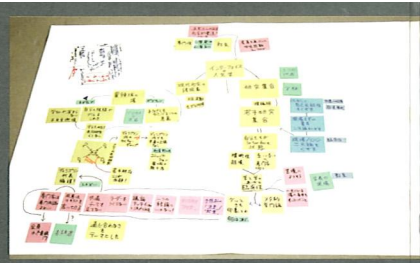
　戦後の学問を見たとき、人類学から「構造主義」が出てきて「構造」という言葉が人文学のディシプリンになって、文学理論にも哲学思想にも歴史学にも一斉に革新運動みたいに使われたじゃないですか。八〇年代ならば「差異」とか「記号」っていう言葉が出てきて、文学も哲学も記号学の発想を採り入れるし、都市論だって記号として都市を読み取れというようになる。「脱構築」とか「現象学」といった言葉もそうですね。人文科学にも一斉に革新が起こるような概念がいくつも出てきて、そのたったひとつの概念によって、同時にいろんなところで地震が起こってしまう。そういう時に居合わせるとワクワクしてしまうんですよ。

　じゃあ我々のインターフェイスの人文学はどうか。皆さんの事前レポートを読むと、くしくもある種面白いことがあって、それが研究会を瓦解させないで繋ぎ止めてきたと思うんです。加藤さんが言った「なんであんな嬉しそうな顔してるんだろう」という思いかもしれないし、研究会自体が他人と一緒にどこに行くともわからないゲームのような感覚なのかもしれない。あるいはこういう討議支援マップが新鮮なのかも知れない。昔、自分たちが習った先生方が「学問は面白い」といったのとは、少し違うものが出てきていると思うんです。それをはっきりと見えるようにしたい。

鷲田清一（わしだ・きよかず）
1949 年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。関西大学などを経て大阪大学大学院文学研究科教授。著書に「モードの迷宮」（ちくま学芸文庫、サントリー学芸賞受賞）、『「聴く」ことの力』（TBSブリタニカ、桑原武夫学芸賞受賞）、『悲鳴をあげる身体』（PHP新書）、『メルロ＝ポンティ ― 可逆性』（講談社）など。

森 宣雄（もり・よしお）
1968 年生まれ。2003 年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。COE 特任研究員をへて 06 年 4 月より英知大学文学部助教授。専門は沖縄・台湾の近現代史。『台湾／日本一連鎖するコロニアリズム』（インパクト出版会、2001 年）、『戦後初期沖縄解放運動資料集』（不二出版、2005 年、共編）、『岩波講座　アジア・太平洋戦争』（2006 年、共著）ほか。





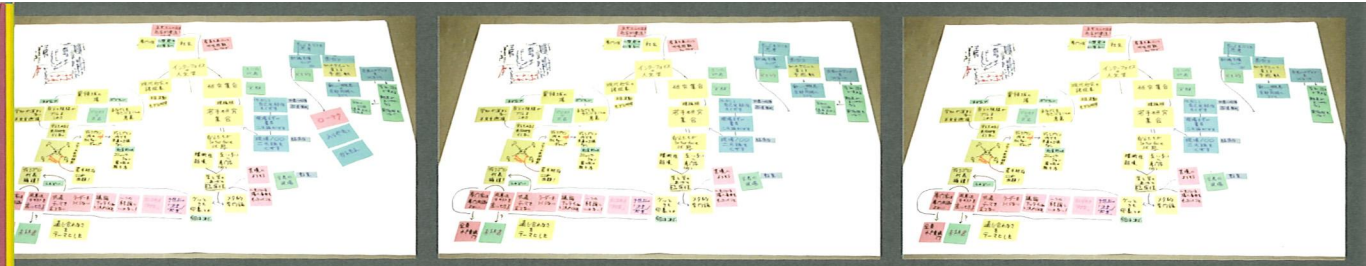
討議支援マップというメディア

森　僕たちは討議における出会いと触発の場づくりをデザインするなかで、モノを介した思考としての知的生産のエンジン、方法を模索してきたわけですが、たしかにこの討議支援マップを含めて、ツールやメソッドによってガラッと変わるんですよね。

鷲田　私にはこのマップはすごく民主的に見えます。つまり、何かこの中に、強烈な力が働いて濁流のように流されて行くような強いものはあまり感じられなくて、思考のデモクラシーのような印象がありますが、実際どうですか。

久保田　このマップは一人で問題を解決するんじゃなく、自分の意見をいったん外に出して、議論を促すためのツールだと思うんです。話の流れが可視化されて目の前に置かれていますよね。だから互いの意見の位置関係もはっきり見えるようになり、当初のひとりの考えが触発を受けてどんどん変わっていくこともあります。

森　共有のメディアを作って、みんなそこに加わって自分も喋りながら、要約して意見をマップに落としていく。最初は、未完成の専門用語化されていない発言をマップ



に落とすのはいやだと抵抗を感じる人もいました。しかしその場での要約と共有をはしょってしまうと、討議を振り返ってみるとき、マップに載らなかった発言は共有されなかったということになるので、言いっぱなしにした意見は原則的に存在しなかったことになるわけです。

結局、このマップはコミュニケーション・ツールですから、共有のメディアに載せることで学知とか語りが変わってくる。未完成の理論化されていないものだって、そのまま出せる勇気が出てくる。そうすると学知の堅い理論的な思考と生の感覚が混ぜあわされ、他の異分野の触発も受けて新しい概念が生まれ、異領域をつなぎ、そして全部同時的に動いていく。そうしたことにつながるんじゃないか。

加藤　何かひとつのことを達成しようと思ってやっているわけではない。それでもマップを見ていくと必ず上がってくるキーワードとか、中心になるような言葉があるらしいことは見えてきてると僕は思うんですよ。何か、みんなが引っかかるようなキーワードがこの場でポコポコ生まれてきているような気がしています。

森　近代アジアにおける思想連鎖をめぐって「知の回廊」っていう言葉が山室信一さんの造語でありましたけど、「学知の回廊」というイメージですね。先ほどの「構造」なら「構造」という概念が異分野の中でどうめぐりめぐっているか、あるいは自分たちがこの場でその回廊関係をどうやって作っているか、どうすればもっと自分のものにできるか。

鷲田　このマップの場合、不思議なのは今の時代にあえて頭をつき合わせてやるやり方ですね。その効果、意味というのは大きいんですか。

久保田　最初の案としては、デジタルでみんなで書き込み可能な方法をとるという案もあったんですけども、やっぱり紙というアナログのモノを囲んで座ってサインペンとか誰でも使えるツールを使ってやることが大きいんじゃないかって考えました。仮想の世界ではなくて目の前にある、体感できる感じ、それがすごく大きいんじゃないかと。

森　パソコンで議事録をまとめるのとは、民主性が違うんですよ。

山室信一
『思想課題としてのアジア
—基軸・連鎖・投企』
（岩波書店　2001）

内田樹・春日武彦
『健全な肉体に狂気は宿る
—生きづらさの正体』
（角川書店　2005）

パソコンだったらブラインドタッチで早く打てる人じゃないとできない。するとそれができる人が秘書的な役割を負わされて全然喋れなくなる。その気まずさを解消するには、こういうベタな道具だったら誰でもできるし、目の前で作業するわけですから喋るときのマナーも変わる。ローテク、入りやすい、簡単、手軽。そういう意味でいい道具ではないかと。

三谷　ただ、こういうメソッドを人に説明するときにどう説明するかが難しそうですね。ここでみんなが実際に経験したことっていったい何なのか、何が共有されていて、なおかつここに参加していない人にはどうやって伝達することが可能なのか。

久保田　そこが難しいとずっと思っているところです。この討議空間のデザインを考えてきた中で経験したことによって、たしかに変わったよねと、研究員のひとはそれぞれおっしゃるんですけど、何がどう変わったのか形にできない、言葉にできないという話にもなるのです。

森　それで最終的にはＤＶＤという手段を視野にいれています。たとえば、今こうやって話しながらどんどんマップを作り、共有の場づくりを進めているのですが、この過程は文字では伝えきれない。

三谷　これは一種、演奏会の感覚ですね。ようするに今日の僕はこの場に一緒に居て臨場感をもって聴ける聴衆みたいな存在です。それを後からＣＤやＤＶＤで録音されたものを聴いて同じ感覚を持てるかどうか、そこがポイントですかね。結局、時間と空間を共有しているっていうことがすごく大事なんでしょう。一緒に参加しているということが現時点では圧倒的な意味を持っている。

鷲田　この研究会は明らかに問題解決型の議論ではないですよね。みんながまだ多くをつかめていないもの、おぼろげにしか形にないものを形にしていくような作業に立ちあっている。

加藤　このマップはそうした議論を視覚的に見せつけられるような感じです。

久保田　もし研究者の論文の作り方が、中途半端な感情とか揺らいでる感じというものを突き詰めるのではなく、切り捨てていって結論につなげるようなやり方をされているのであれば、この場は逆に、驚きとか揺らぎといったものが浮かび上がってきているように思います。そういうことを可視化して、しかも同じ場の人と共有できるっていう経験の深みは、普段の社会生活ではなかなかないんじゃないでしょうか。

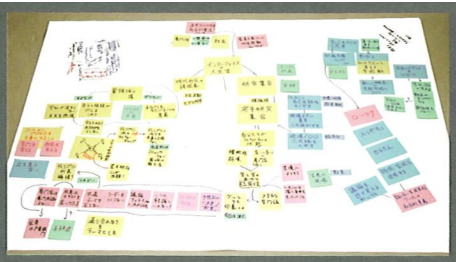
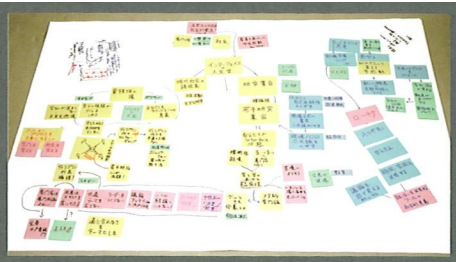
共有される場を立ち去らないこと

鷲田　皆さんはこの手法によって、いろんな抑圧が解除されてきてますか？

それぞれディシプリンを背負っていて、発言にも抑制がかかりやすいわけでしょう。そういうものから解放されることはありますか？

加藤　発言しやすくなっているのはまちがいないですね。

森　話や文章が分かりやすくなったといわれます（笑）。専門家的な厳密さを突き詰める論文的な思考のほかに、分野を超えて分かち合うための技術も必要だということ

を学ばせてくれる場になりました。

鷲田　これまでの人文学研究は、さまざまな資料と向き合って読み込んだり、先行研究を読むといった単独の作業の中から、それを超える視点や概念を打ち出し、ドンと発表するというようなイメージでずっと来たんだけど、果たしてそれでいいのだろうか。もっとプロセスの意味を考えなくちゃいけないんじゃないかということを強く感じます。

　このマップだって、文章にまとめたらたいした文章にならないと思うんですよ。ところがこうやってキーワードが散らばってあると、いろんなことを思い浮かべるし、次の思考のヒントも出てきますね。プロセスをとにかく短縮しようとするんじゃなしに、執拗に、納得できないことがあればもっと時間を延ばしてでも話し合う。**ゴールじゃなしに途中のプロセスを大事にすること**の意味、それを考えるのが人文学において次のポイントになるのかなと、今日この討議支援マップというものを実際に見せていただいて思いました。そして、なぜプロセスの共有が必要なのか、なぜゴールよりもプロセスのほうに今、人文学のあり方を変える意味や意義があるのかっていうことをも考えさせられますね。

　たとえば生命倫理の問題で、人はいつから人になるとみなすのかという問いは、結論だけとったら一行で済むことなんですね。でも、それを決めるのにどれだけいろんな種類の会議を開き、話し合いをし、論拠の応酬をしているか、そのプロセスがどのように作られているか、ということがひょっとしたら結論より重要なんじゃないかと私は思うんですよ。プロセスの議論がとことんまでやられていたら、三か月以降を人とみなそうと、生まれた瞬間からみなそうと別にどちらの結論になってもそれなりに受け入れられる。確かに現実問題はすごい差異が出てくるけれどもみんな納得できるわけです。これは学問の話ではないですけれども、学問においてもそういうことってあるんじゃないでしょうか。

森　学科や分野で別れて散らばっていたものを集めて、プロセスを大事にもう一度議論し直せば、別の方法論や視点が生みだされてくる。

鷲田　今までの共同研究や学際研究と言われるものでは、違う分野の人が一日寄って研究会を行い、また数か月後に寄り集まる。発表にしても、それぞれ順番に行って、本にするときもそれぞれの論文を並べる。あのやり方は、一緒にやっているようなフリをして立ち去るんですね。すぐ自分の場所に帰ってしまうことなんですよ。でもこの若手研の討議はずっと継続的にやってきて、誰もここから**立ち去らない**というステージでしょ。その立ち去らないということ、言い換えればプロセスを重視するということが一番大事なのではないか。それは、なぜ立ち去らないかということを考えることでもありますよね。

三谷　立ち去らないこと——まさにこれからの**学問、そして社会のあり方を考える**ときのいいキーワードになりますね。

鷲田清一×河合隼雄
『臨床とことば』
（阪急コミュニケーションズ 2003）

＜研究集合＞の発展のプロセス

2004.04
若手研スタート

2004.05
「自己紹介研究会」開始

2004.12
「インターフェイスの人文学」COE全体ワークショップ（中之島センター）

2005.01
ラボとコラボ
メディアラボ（研究推進のためのメディア利用・開発・提案やデザインを担当）メンバーとのコラボレーションを始める。以後、「記録」のとり方と場づくりについてさまざまな方法を試行。

2005.05
「＜人文学の討議空間＞のデザインと創出」プロジェクト開始

2005.05-06
臨床ってなに？
「臨床性を語る会」で、現場性、社会性、社会的有用性、研究者の倫理性、立場性など臨床性概念と類縁関係にある各分野の諸概念について比較検討。また読書会「〈臨床の知〉の共同研究体制を考える」で、研究会での臨床性概念の活用方法を具体化。

ミッション到来！
各モデル研究グループに属してはいるが、普段交流の少ない特任研究員が集められ、鷲田リーダーから「人文学についてのまったく新たな問いを発見せよ」とのミッションを与えられる。

通じ合わない、話し合い方がわからない苦しい時期・・・
各自の専門の論文を「自己紹介ペーパー」として提出し、異分野間の討議にかける。何を共同研究のテーマとするか、はてしなく議論がつづく。

ようやくかたまってきた
「科学技術と社会」「芸術と芸術研究のあいだ」「学知のかたち、組織のかたち」の3セッションで若手研究員がCOE事業推進者（教員）とコーディネイトし報告。この研究会の場自体を臨床・横断の「現場」として「共同研究を共同研究する」ことをテーマに提案。

ゴールを設定
若手研の到達目標を、新しい人文学のあり方を創出する学問的討議空間の場のあり方をデザインすることとする。参加自由の世話人会＝編集委員会発足。

若手研究者による若手研究者へのインタビュー

月2回開かれる若手研

COE全体ワークショップ（中之島センター）

2005.09

これでやってみよう

情報処理工学での対面的コミュニケーションソフトや、ワークショップデザイン論などを参考に、ラボと共同で研究会の記録・進行について新しい方法を提案。

2005.10-12

話し合いが変わった!!

テキストによるオンタイムの議事録を会場に投影し共有。議論を活性化させるための、模造紙とポストイット（付箋紙）を使った「キーワードマッピング」のスタイルにとりくむ（現在の討議支援マップ）。議事録／ビデオ／写真／音声による記録が本格化。

DP(ディスカッションペーパー)による研究討論会

2006.02

プロセスを作品化

若手研の活動におけるプロセスそのものを、マルチメディアを使って〈見せる〉報告媒体（DVD）の制作を決定。見せる「討議空間のデザイン」。

DVDワーキンググループ発足

2006.03

DVD制作に伴い、若手研究者間のインタビューを開始する。

中間報告書発行

2006.06-08

2周目開始、さらなる深化へつづく・・・

DP（ディスカッションペーパー）研究討論会を踏まえて、最終報告書に向けて活動中。

DD（ディスカッションのためのドラフトペーパー）による研究討論会

2006.09

人文学を超えて、外にも

「共同研究プロジェクト〈人文学の討議空間〉のデザイン」について講演発表

FIT2006 第5回情報科学技術フォーラム（情報処理学会など主催）

＜研究集合＞を進めるにあたって、5点の「ツール」が採用され、各々の使用方法がデザインされた

DP（ディスカッションペーパー）：
研究会の主な内容は、メンバーによって執筆されたディスカッションペーパー（DP）の検討である。各回2～3名のメンバーが担当し、事前にDPを提出する。DPは、学術論文としては未完成ではあるが、それゆえに、異分野の研究者同士が討議を行う余地が生まれるという特徴がある。執筆者以外のメンバーは、研究会前にコメントを送ることが課せられる。

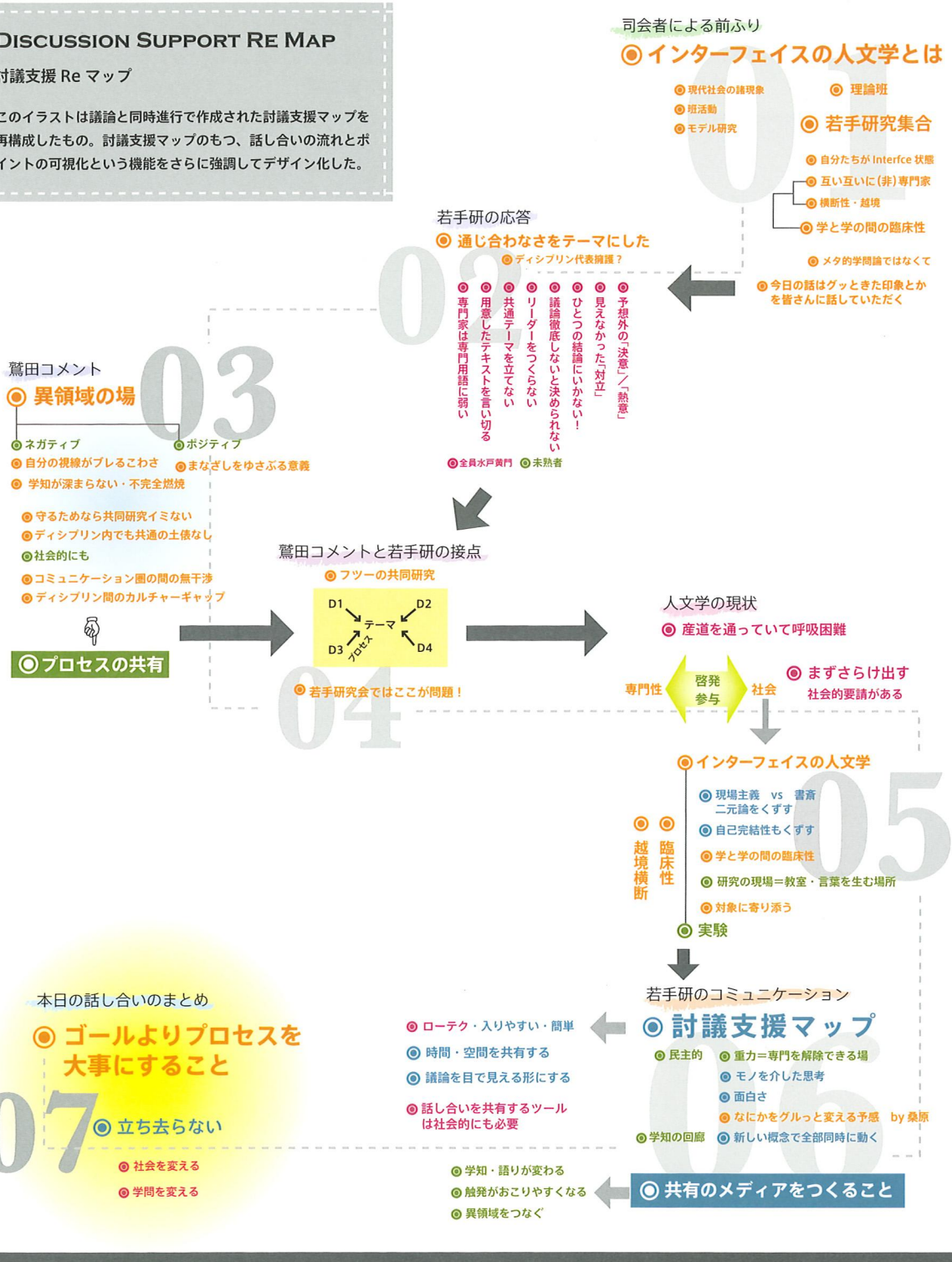
ML（メーリングリスト）：
DPの提出、及び事前のコメントの提出にはメーリングリストが活用される。

討議支援マップ：
議論の進行を促し、内容を可視化するため、ディスカッションの中で「キーワード」（専門用語、概念、印象・感想）が出される度に付箋紙に記し、模造紙に貼付。また、キーワードどうしが接続され、議論の流れについて説明が加えられることもある。

議事録：
研究会中には、発言内容をパソコンを用いて同時進行で記録し、プロジェクターで投影しつつ、議論を行う。参加者は、投影された発言内容を参照しつつ、議論を進める。

記録：
研究会での議論内容は、議事録の他に、ビデオカメラ、デジタルカメラ等が用いられ、音声・画像・動画として記録される。討議支援マップの写真は議事録と共にネット上で共有される。

DISCUSSION SUPPORT RE MAP

討議支援 Re マップ

このイラストは議論と同時進行で作成された討議支援マップを再構成したもの。討議支援マップのもつ、話し合いの流れとポイントの可視化という機能をさらに強調してデザイン化した。